

短歌

天 菅原喜代藏

薪負ひて都にいそぐ賤の女の

けづらぬ髪にみぞれ降るなり

地、閑居 や ま 子

わけくれの友とさくこそうれしけれ

峰の松風谷の水おと

人 鹽野政子

大島の瀬戸の高波治まりて

霞に沈む松風の音

◎ 大空に木枯高くさゆる夜は物すこやかな星の林も

◎ 定めなき雲間にすみて人の世をのぞくと見ゆるさくらへ男の子

◎ 大空にひたばしる雲大鯨の洋に漲ける様にも似たり

◎ 吹雪する冬の寒き日幼子に手踊させつ旅する身哉

馬しきて大根を市にひさぐ女の息氣もこぼりて木枯の吹く

◎ 鹽野奇零

迷ひ入りし森の細道さすらひてふと得し詩には、えむ我や

◎

春の日は草家の軒に糸車めぐれる音ものどかなりけり

◎ 菅原喜代藏

萬代と深え行く可き姿かな年立つ今朝の松島の松

◎

旭子の光りをそへて老松に初聲あげし千代のひな籠

◎

にひ年の幸ある門に乙女子の羽子つきあそぶ袖美しき

◎

嬉しさを胸に秘めつゝ右左別れてかへる朧夜の道

◎

春がすみ沖の小島に柵引きて魚とる舟の見えかくれる

◎

たちならぶ岸の姫松かすむなり沖の白帆もかけ見えぬまゝ

◎

天宮に秘めし白衣を召しませる姫に、似たり雪の富士かぬ

◎

なき君の涙に似たる露おきぬともに愛でもし庭の白萩

◎

常闇の胸のうつろに住め甍をはらひて清き朝心地かな